

■大内義弘 武将。巨大な領国得て大守護大名になり、倭寇征圧を求める朝鮮と交易を始めて、財政基盤も確保。

おおうちよしひろ

菟玖波集・・・1356＝

自らのルーツを百済の王子とする大内家で、弘世の嫡子に生まれる。

・・・・・・1365＝9歳：

足利義満将軍1368＝12歳：

室町幕府の安定化をみてその体制下での生き残りを図ろうと考えて、北朝・室町幕府への帰服を一時的なものとして捉える。父弘世と対立するようになり、

・・・・・・1371＝15歳：父弘世とともに九州探題今川貞世(了俊)に従い、九州に渡り転戦するが、

応安新式・・・1372＝16歳：大宰府攻路後に弘世とともに帰国。

歌人でもあった今川貞世(了俊)の影響で、和歌・連歌を嗜むようになり、

観世父子登場1374＝18歳：貞世の救援を命ぜられた父弘世がこれを拒んだとき、

・・・・・・1375＝19歳：すすんで出陣して各地に転戦し、

西下した連歌師周阿から、二条良基に託された、その連歌学書「知連抄」を伝受している。

高麗倭寇レ1377＝21歳：懐良親王を奉ずる菊池武朝を大敗させるなど、南軍攻略に大功を立て、

室町御所始・1378＝22歳：高麗が倭寇取締まりを謝して今川貞世に送って来た際、別途使者韓国柱の来贈を受け、

義満親政始・1379＝23歳：その帰国を朴居士に兵を付して護送させて、\*大内氏として初めて朝鮮と交渉を持つ。石見守護職が与えられ、父との力関係を逆転、

・・・・・・1380＝24歳：舎弟満弘との間に継嗣を巡って大規模な争い(康暦内戦)をしている最中、父が死去、

了俊九州支配1381＝25歳：\*幕府の支持も得て勝利を収め、満弘を石見守護職に任じることで和解、周防・長門・豊前の守護職の家督を継いで、地位を確立した。

義満准三后・1383＝27歳：

・・・・・・1384＝28歳：

この年、後小松天皇に奏覧された「新後拾遺和歌集」に二首入集するなど、中央の覚えはめでたい。満弘との争いはほどなく再燃し、満弘を擁する益田氏との交戦が続き、その間、石見守護職は満弘の弟に与えられ、自らの守護のもとに、石田弘直が守護代となる。

四辻善成が「源氏物語」の講義をした際、在京雑掌の平井道助(祥助)に欠かさず聴講させている。

高麗軍来寇・1389＝33歳：足利義満の畿島詣での西下を防府に迎え、歓待の限りを尽くし、随行して上洛、以後、在京が多くなる。

この間、朝廷の神祇を司った吉田兼敦との関係も深め、自国の神国化につながって行く。

明徳の乱・・・1391＝35歳：明徳の乱には洛西内野で勇戦、幕府軍勝利の立役者となり、

南北朝合一・・・1392＝36歳：\*その功により山名氏の旧領国の和泉・紀伊の守護職を与えられ、防・長・豊・石・泉・紀6州の大守護大名になる。また南北朝合体の和睦斡旋に成し遂げて、幕府諸大名から畏敬を以て迎えられ、

・・・・・・1393＝37歳：満弘との争いがようやく完全に決着。外様でありながら、義満から一族に準ずる御内書を与えられ、

義満出家・・・1395＝39歳：貞世の失脚で、朝鮮との交渉の実権を握り、李氏朝鮮とも初めて通交、相互に使者が往来、倭寇の禁止と引きかえに貿易上有利な立場を築いて行くが、

金閣寺・・・1397＝41歳：僧永範を派遣した際、義満の命により諸島の倭寇を禁止したことを告げたが、朝鮮は朴惇之を派遣して義満に謁し、重ねて倭寇の禁止を請わせており、義弘が幕府と朝鮮とを仲介しながら通交上有利な立場を固めていたことがわかる。筑前で弟満弘が戦死、

・・・・・・1398＝42歳：朝鮮の使節を迎えて接待。

応永の乱・・・1399＝43歳：世系が百済の後高であることを理由に、朝鮮に縁故の土地の割譲を求めた。\*幕府の集権体制に沿わぬ外様の大名として、また幕府が目し始めていた対明貿易の競合者として、幕府の抑圧対象と目されるに至り、義弘は下向して少弐氏を討ったが、平定後も義満の上洛催促に応ぜず、ようやく大兵を率いて和泉堺に着き、幕府の慰撫を退けて乱を起した。その叛乱計画は鎌倉公方満兼を誘い、その呼びかけで諸大名家の不平分子などを糾合するものであったが、地方での挙兵は間もなく鎮定され、堺の籠城戦も陥落し敗死した。